

福澤諭吉立案  
中上川彦次郎筆記

日本婦人論

後編  
全一冊

明治十八年八月出版

序言

日本婦人論の後編總て十章過日來時事新報の社説に載せて世に公にしたるところ大に世人の讚賞を得て追々同感の論説を寄送せらるゝ貴女紳士に乏しからず。井七日ばかり以前の事なりき。或る紳士が態々時事新報社に來訪せられての話。小生の今日時事新報記者に向ひ怨と申しに參りたり。夫は餘の義ふわらず彼の日本婦人論一件なり。數日引續きての長物語實に妙論名文ありと感讀の折柄爰に大災難の降り來りしと申すは何う。本年は紺色の帷子單物類が流行致すと。にて荆妻より夏着新調の相談度々あきども小生の持論。夏は白と貴ぶ紺の單物かど。は以ての外。の事ありとく飽くまで反對防禦致し居たるが残念なるか。時事新報は日本婦人論一たび世に出。以來攻防の形勢俄か一變し。昨夜遂に荆妻の説が勝利を得て。今朝小生が家と



出る時門前まで早くも越後屋の手代が注文の品々を持來るに出逢ひたり實に無念千萬なる次第ありと語ると聽け記者も共く一と一と致またり一編の日本婦人論讀む人の思ひくも言はん惡しとも言はん兎角廣く世人に一覽と請ひて輿論の如何をも窺ひ知り度依て今更に全編十章と一冊子に纏宛て貴女紳士の坐右に呈せることしうり明治十八年七月二十四日時事新報社樓上に於て中上川彦次郎記す

## 日本婦人論後編

福澤論吉立案  
中上川彦次郎筆記

吾くは過ぎし頃より日本婦人論と題して時事新報の社説に載せ世間人は既に之と讀み給ひし事なふんと思へども此論の文章文字とも少しく四角おして新報讀む人よりよく理會せらるゝも廣く他人へ話しするときはさよの不便利も知らんとを恐れ今度の平仮名まじりにて平たき文を綴り前の婦人論の後編として世に公にせんとぞ但し同玄事柄と表裏より繰返して言ふとなれば前編の文と重なる所もあらんなれどもそは記者の才の足らずして筆の拙さき故なりと宥し給はる可し扱前編は婦人の男子と同様の身分にして同様に權利を持ち財產身代として男子と同様に所有を可き筈ありとの次第と述べ其趣意

の誠まことに合あ點てんし易やすに道理道理にして疑うたがふ可べきにも非あらざるも何なに分ぶんにも幾いく百ひゃく年ねんとぞ男子おとこのみが我わが儘まま勝手がてにして婦人おんなとば有あるか無なしにまたる國くにの風俗ふうぶくあれば今吾いまわれの筆ふでをもて道理道理至いた極ごくは事ことを記しすも男子おとこ又また於おて不同意ふどういと言いふれみならず利益りやくの正ただ面めん又また當あたる婦人おんな迄いたり却かへて新しん工く風ふうを悅よろこぶとざる者ものあるやも計はかる可べからず、こは子飼こかひの驚おどろが籠かごと出でるを知らず、放はなす馬うまが廐うまや又また歸かへるに等おなしく一尺いちせきの籠かご狭せましと雖なども二間にけんの廐うまや窮きゆう窟くつなりと雖なども年月としつき摺すり餅もち又また養やしなはれ飼葉かひばの味あじに慣なれバ花はな又また嘯さへり野の又また驅かるの持前もちまへの之これと忘却ぼうきやくして今いまの眞實しんじつの苦痛くつうと知らず、唯ただ淺あさましに次第しだいと申まをすべきのみ、西洋せいやうの古ふるに語こと又また自みづから汝なんぢの身みと知しれと云いふとあり即すなはち人ひととして此世このよにあらば第一だいいち自分じぶんの身みの上うへと知しるよと肝要かんえうなりとの意い味みにして例たとへば今女子いまおんながこの世このよに生なれ男子おとこに對たいして如何いかなる身分身分のものあるや之これを知らざるべからず、男女おとこ格別かくべつ又また異ことなる所ところは唯ただ生殖せいじくの機關きかんのみ、是

きとて也なり双方そうほう唯ただそれ仕組しくみと異ことに在あるまでとて孰たゞれと重おもしとし孰たゞれと輕かろしとすべからず其外そのほかは耳みみも目めも鼻はなも口くちも手足てあしの働どう、臟腑ぞうふの鈞合きんが、骨ほねの數血かずちの運動うんどう等らう又また至いたるまでも都みなて休やすみ質しつに微塵みじんの相違さうゐなきのこゝろ其心こゝろは働はたらきに於おても正ただしく同様どうがうにして男子おとこの爲ためす業わざにて女子おんなに叶あはざるもれ亦またし文明ぶんめい開化かいけ次第しだいに進すすみ行いくときは女子おんなに職しやくと執とるの珍めづらしからぬ例たとにして既に亞米利加あめりかなぞにては婦人おんな又またして電でん信しんの技ぎ術じゆつ其外そのほか様ようの職工しやくこうたるのみならず或あるは醫師いしやとあり或あるは商人しょうじん會社かいしゃの書記しやくき又または政府せいふの官員くわんいんたる者ものも多おほくしてその仕事しごと次第しだい又または男子おとこよりも却かへて用便ようべんになることゆりと云いふ唯ただ日本にっぽんにては未いまだこゝろと試しみざるのこゝろ或あるは試しみても婦人おんなは詰つまり役やくに立たたぬといふか若わかしも然しかるなれば夫おとこれ婦人おんなの性質せいしやうに非あらずして斯かくも婦人おんなと役やくに立たたぬやうに仕し爲なしたる原因げんいんあきば其その原因げんいんを取除とりのぞくよを肝要かんえうなるべし如何いかに無む理りある説せつと作つくるも世

界中等しく人間にして西洋の婦人之役に立ち日本の婦人の然らざとの道理はなかるべし西洋と日本と風俗相異なるが故に婦人の働も相異なりとの事實明白ある上の一日も早く我風俗を變へて西洋風と爲し婦人も一人前れ用を爲すべき工風と運らすは我日本國の男女共に専ら心掛けて勤むべきことなり

左れば男女の釣合は其體質に於ても其心の働に於ても異なる所の更になくして正に平等一様のものたるは争ふ可らざるの事實ならん人と萬物の靈ありと云へば男女共に萬物の靈なり男子なくしての國も立たず家も立さずと云はゞ女子なくしても亦國家あるべからざれ孰れと重しとし孰れと輕とすべしや吾々の目を以てすきは何様に見ても其間に輕重貴賤の差別あらんとし思はれず或は支那の儒者流まで男女と陰陽に喩へ男は陽にして天なり日なり女は陰にして地なり月

ありとて一方は貴く一方は賤しき者のやうに説と立て之を自然の道理として怪しまざるもれ多しと雖も本來陰陽とい儒者の夢話にして何も取留めたる者あるも非を數千年前無學文盲の時代に天地間の萬物と大略見渡し何か似寄りのもの二個ありて其一つの物が強く盛ん見え相手は一つと弱く靜に見ゆれば此れは陽なり其色は陰なりと勝手次第に名と附けたるとなり例へば天地と見れば天井と疊との如く似寄りのもれよして一方は低くして足も踏み一方は高くして手も届かず故に天は陽なり地の陰なりと云ひ日月共に圓くして光り一方は熱くして大に耀き一方は耀けども少しく暗し故又日之陽にして月の陰なりと云ふ位の事にして今日より考れば小兒の戲言たるに過ぎず畢竟陰陽に附き定まりたる徴はなければ先づ心の中に二様の考と書き置きて己が了管にて是を少し優りするものと思へば陽の部

に入れ、夫れは聊いさう劣おとりたりと思へば陰の部類ぶるいに入れ夫れより様々の  
 説たひと作りて戯言たひごとと賑にぎやかにするまでの空論くわろんなり故に男女と見ても固もとよ  
 り陰陽の區別くくわあるべからざるのこゝ其陰陽てふもれさへ本来ほんらい空物くうぶつを  
 れば何なんとして男女に如何いかある微あろしもあつざきとも儒者の流儀りうぎの學者が  
 婦人ふじんと見て何なんとかく之と侮あはれ何となく男子より劣おとりたる様やうも思込おもひこみ  
 例れいの如く陰性いんじやうとして己おのが腦中なうちうにある陰の帳面ちやうめんに記ししたるものあり婦  
 人にんこそ誠まことに迷惑めいわく至極しごくの譯わけにして縁えんもなき天地日月てんちじつげつと持出もつだして陰性な  
 ど云はるゝは儒者の無學文盲むがくぶんもうに強しひらるゝ者と云ふべし吾々がいま  
 戯たはむれと説せつを作り婦女子ふじよしは華美くわびにして賑にぎやなり金玉きんぎよくの光明くわみやうの日月星辰じつげつせいしんの耀か  
 くが如く顔色かんばんの秀ひいでたるの春はるの天そらに花はなの爛熳らんまんたる者に似たり、男子は美  
 ならずるに非ずと雖なほども婦人に較くらせば何となく内端うちばにして静しづかかりそ  
 の武骨ぶこつなるは枯木かれきの如く、動かうごかざるは大地だいちの如し故に婦人の陽やうにして

天と日あそらと擬なぞらへ男子の陰にして地と月かたどと象かたどると云はゞ是亦これまた一説いつせつとして  
 通用つうようせし先まへざるを得えず陰陽論いんやうろんの無條理むじょうりなること斯かくの如し逆さかも是等これらの  
 戲言たひごとと今日けふに用もちひんとするも文明世界ぶんめいせかいに許ゆるさずればなかるべし  
 前まへの論ろんの末段まつだんは少すこしく戯たはむれに似たれば今また本ほんは眞面目しんめんもくと立戻たちもどり何  
 故ゆゑに日本の男子が女子と粗末そまつに取扱とりあつかふかと一通り其説を聞て其無理  
 なる次第しだいを述べんとす女大學にんだいがくに云く  
 凡婦人の心こころ様の悪あくき病びやうは和やら順したがとざると怒り恨むと人と謗ると物  
 妬ねたむと智恵ちゑ淺あきとあり此五の病びやうと十人に七八しちぱちの必ずあり是れ婦人  
 の男に及およばざる所ところあり自みづから顧かへみ戒いめて改あらため去さるべし中なかにも智恵  
 浅あき故に五疾ごしやくも發おこる女は陰性いんじやうなり陰の夜にして闇くらし故に女は男  
 に比くらぶに愚おろみて目の前まへなる然しかるべき事こととも知らず又人の誹そとるべし  
 事こととも辨わきまへず我夫我子の災わざはひとあるべき事こととも知らず科とがもなき人と

怨うらと怒いかり呪のろひ或あるのひとと妬ねたみ憎にくむ我身わがみひとり立たんと思おもへど人ひとに  
 憎にくまを疏うとまれて皆みなわが身みの仇あだあることを知らず最いとはりなく淺あさまし、  
 子こを育そだせども愛あいも溺おぼれて習ならはせ悪あし斯かく愚おろなる故ゆに何事なにごとも我身わがみを  
 へりくぶりて夫おつとに従したがふべし古ふるの法はに女子むすめと生うめば三日みか床ゆかの下したに臥ふ  
 しむと云いへり是これれも男おとこの天あま又また假たへ女むすめは地かたに象かたるもる萬よろずの事ことも付つき  
 ても夫おとこを先さき立てて己おのれが身みと後あとよし云々  
 此この文ぶんは眼目がんもくとそる所ところの婦人かみに限かぎる五ごの病やまいを擧あげて斯かく々々なるが故ゆに婦  
 人の男子おとこよくくらべく劣おとるもれあり劣おとるが故ゆも男子おとこの言いふがまゝ又また從したが  
 ふべしとの趣意しゆいなり成なるほど男子おとこをして婦人かみの心様こころさまと診察しんさつせしめた  
 らば病やまいに相違さうゐありるべし男子おとこの心様こころさまになき病症びやうしやうも發おこるならんかれど  
 もそもく其病そのやまいの原因げんいんの何いれの邊へんより來きたりしものあるやと尋たづねば吾  
 くくの矢張やはり儒者じゆしやう流りゆうの教おしれ中ちゆうに在ありりと云いはざると得えず今いまの教おしを寫うつ

したる女大學おんなだいがく全部ぜんぶの大意たいいと擧あげば凡たゞろ左ひだりの如ごとし云いく女おんなは朝早あさはやく起おき  
 夜よるおそく寢いねて晝寢ひるねと無用むようなり酒さけも茶ちやも多く香かほむべりらず歌舞伎かぶき小唄うた  
 淨瑠璃じやうるりなどは一切いっさい見聞けんもんすべりらざるのみり年とし四十よじ歳さいなるまでは人  
 の群集ぐんじゆする宮寺みやでらへも行ゆくべからず又また夫おつとの朋友ともだち其外そのほか年若とわかき男おとこへへ容易ようい  
 に言葉ことばとも交まじゆべりらず度々たびたび親おやの方ほうへも行ゆくは宜よろしからず况いはんや他  
 人の家うちに於あてをおつと夫おとこの許ゆるなけば何方いづかたへも出でることは無用むようにして文  
 通つうも相成あひなはず饋おくものも相成あひならず又また女むすめの身みの衣裳いしやうは穢きたすして潔きよければ  
 夫おとこをおつと十分じゆうぶんなり染色ぞめいろ模様もやうおど時ときめかして人の目めに立たつは甚はなだ宜よろし  
 けらず又また婦人かみは別べつに主君しゆくんおし夫おつとと主人しゆじんとして都みやこて其下そのした知しに從したがひ聊いさも  
 叛そむくべりらず女むすめは夫おとこと以もつて無上むじやうの天てんとして崇あがめ尊たかふべきものあり又  
 女の七去しちきよは舅姑しやうとに順したがはざれば去さり子こを産うまざれば去さり淫乱いんらんなれば去  
 り吝氣けんき深ふかければ去さり惡あしき病やまいに罹かれば去さり多言たごんなれば去さり盜ぬすむ心こころあ

れば去るとして夫の自由自在之を退出すこと甚だ易し又婦人の淫乱の斯く嚴禁あれ共男子の方は至て便宜しく妾と幾人にて差支なくして是れは淫乱の部類あらず故に男子の淫乱とは本妻も妾も十分に備はりざる尙その上に言語道斷なる振舞ありて始めてみれと淫乱と申す少しく不都合なれども是れとても彼の七去の権力は男子の方より掌握して婦人の方には一去の権をければ依令へ夫が淫乱なるも之を去る事の叶とざるのまか、これと怒り怨むことさへ禁制にして努々嫉妬の心を發すべからず唯顔色と和らぐ聲をやわらかよしてこれを諫るの一法あるれと

以上の教に従へば婦人の起居も自由ならず、飲食も自由ならず、歌舞伎鳴りもれ等の樂も差留めらるべき、衣裳を着かざる事も叶はず、家の外に出ることを禁ざられ、人々附合することを妨げらるべき、尙その上も夫の氣向

次第に何時離別せらるゝやも計り難くして一家は世帯を持つとの申しながら其身の上は不安心なるは薄き氷と踏で深き淵と渡るが如し首と擧げて男の世界を仰ぎ見れば恰も主君の位と以て威張り通し、内も外も己が意の如くならざるのちし誠よりやましき次第なり今男子の申す通りに任せて婦人の男よりも遙に劣りたるものとすも人間より相違あるべからず苟も人として人並の精神あれば苦痛に逢ふて安樂なりと思ふものと出来難かるべし男子の口も婦人の口も芥子は辛くして砂糖は甘し、故に婦人が如何に辛抱えて此の憂き苦界に堪へ忍ぶも欺くべからざるものは天然の道理にしてその心様の何時となく横様に捻るゝも怪しむに足らず時としては和らぎ順はざるもども何らん怒り恨むともあらん又謗り妬むともあらんかれども其本と尋れば男子の方より無理を仕向けて正しく其結果に生じたる者

なれば不思議なる事にあらず然るに事の本とば吟味せずして唯其人  
 を咎るとは何と法外千萬ならずや馬と飼ふ粗末に之を取扱ひ自然  
 に意地の悪るくなりたるを見て此馬は悪馬ありと云ふに異ならず意  
 地の悪るき馬の性質又あらずして飼方の無情あるより出来たる禍  
 あり又世の中に繼母と繼子との不和ある者少あかたせして母の無情  
 と子の不順とれれく説あれども繼子たる者に限りて其天性不順な  
 りとの約束はあるべうらず母子相對して何れか先死又働くと尋き心  
 幼少なる子は無心おしく善惡ともに母の方より仕向るものありと答  
 へざるを得左ればや世間の人も繼子と惡まらずして繼母を咎るも  
 の多し然るに今男女相對し善惡ともに働きを仕掛る者ハ男子あして  
 遂に女子の心様と今れ如くに仕込ながら其罪、女子に在りとは受取り  
 難き話ならずや世れ中の男又して馬の飼様と心得又繼母繼子の評論

して誤らざる者ならば廣く婦人又對しても考る所あるべきものなり  
 世間普通の教として婦人の淫乱あるを咎め其嫉妬と戒しむること甚  
 ぶ行届たり人として淫乱なるは甚た宜しうらず又悋氣深きも随分見  
 苦し況ものあれば男女ともに慎しむべきこと吾々に於て勿論異議  
 あしと雖ども此事又付き唯婦人ばかりを丁寧に戒しめて男子とば忘  
 れたるが如くするは何ぞやそもく是れにと深き由縁のあることに  
 して古より世の人の言とざる所なれども吾々に今男子のさ然には  
 些と氣の毒ながら事の内幕を明さるを得ず元來儒者の教と云ひ又  
 まの教と翻譯したる日本の女大學などにて其作者翻譯者と尋れば  
 何れも皆男にえて此男は同時代一國中の男のために便利ある工風の  
 みと運らして女の不便利に少しも頓着するまとなく思ふさま又教  
 と定めたるものにして之を喻へば下戸の相談に酒屋と擯けく餅屋を

呼よび上じやうと戸この集しよくわい會かいに酒しゆゑん宴えんの發はつぎ議ぎ多た數すうを得うるが如めいし銘めい々々の勝かつ手て次じ第だいに片かた  
 落おちなる法はふを立たつる是せ非ひもあきことなれども暫しばらく心こころを靜ちやうまかして考かんれば  
 人ひとは情じやうよく慾よくは男女なんにょともに少すくしも異ことなるとあるくして嫉しうと妬との念ねんも双さう方ほう  
 ともに深しん淺せんあきれみか男子なんしの方は幾いく千せん百ひゃく年ねんとなく不ふ行ぎやう狀じやうに慣なれて殆ほと  
 んと其てん天てん性せいの如ごとくなりたるが故ゆゑ又また今いま少すくしく之これと取とり締めて不ふ自じ由ゆうを見みせ  
 たらば其い嫉か妬かは如い何かをかりあるべきや恰あたも飢うゑたる虎とらの猛たけるが如ごとく其  
 乱らん暴ぼうの思おもひやふきて凄せまじ中なかく以もつて清きよ姫ひめ日ひ高たか川がはの比たぐ類めいにいあらざる  
 べし今日こんにち諸もろ方ほうの新聞しんぶん紙しと見みても遊くろ廓わが繁はん昌じやうするとて之これがた然ぜんに世せ間けん  
 の家か内ないよて婦ふ人にんが大おほに乱らん暴ぼうしたりとの話はなしは少すくなけれども何いれうの家  
 に男子なんしが跳おどり込こみ刀はち物ものもて婦ふ人にんと害がいしたり其原因おこりの男子なんしが其その婦ふ人にんは  
 云々しかくと邪じや推おし逆さか上あして右みぎの始し末まつなりなど、は毎まい度ど聞きく所ところにいあらずや  
 男子なんしの性せい急きふにしく嫉しうと妬と深ふかきふと或あるは又またまれと評ひやうして執しう着ちやく獅し子しは發はつ狂きやう

玄えん易ぎ者しやと云いふも可かならん今いま試こゝろ又また女にょ大だい學がくの文ぶんをそのまゝに借やく用ようし唯  
 文中ぶんちゆう又またある男なん女にょの文ぶん字じを入いれ替かへて左ひだりの如ごとく記しるしたらば男子なんしの難あり有がた  
 くみれ教きやうに従したがふべきや其その覺おぼ束つかなきは吾われく、が殊こと更さらに言いはずとも日本  
 國くに中の男なん女にょとも等ひと玄えんく心こころ又また合あ點てんする所ところあらん  
 男なんしは嫉しうと妬との心こころ努ゆめく發はつすべからず女にょ淫いん乱らんあらば諫いさむべし怒いかり怨うらむ  
 べからず妬ねた甚かしけきば其その氣け色しき言こと葉はも恐おそろしく冷せま玄えんくして却かへて婦  
 人にんに疎うとまれ見み限かぎらるゝもれり若もし婦ふ人にんに不ふ義ぎ過あやまちあらむ我わが色いろを和やは  
 らげ聲こゑを雅やはらかにして諫いさむべ玄えん諫いさと聽きかせして怒いからば先まづ暫しばらく止や  
 めて後のちに婦ふ人にんの心こころ和ならざるとき復また諫いさむべし必かならずず氣き色しきを暴あくし聲  
 といら、げて婦ふ人にんに逆さかひ叛かくまとありれ  
 日本にっぽんの男子なんし又また命いのち去いてこの教きやうを守まもれと云いは、必かならずず大だい不ふ平へいにし、箇か様やうに  
 窮きゆう屈くつなることあれば此この世よに生うれたる甲か斐ひなしとまで憤いきどほることあらん

左れども男にして生き甲斐あければ女の身に取りても亦甲斐なし世に生きざる甲斐なき者は死人しにん又異ならず己かのれの身には堪忍かんにんすべからざる教を定め他人に向ては堪忍せよと命じ遂つるには之を死人しにん同様に取扱とりあつかはんとす無情むじやうも亦甚しきものと申すべき淫乱嫉妬は固より宜しからず誰たれも知る所なれどもこれを戒いしむるに當り唯婦人むすめあり其身み厳きんしく打うてかゝりて男子の方かたと無罪放免むざいほうめんにするこそ奇怪きがいなれ人の説せつに男の心こころ洒落しゃらくおして吝氣りんきれ念深ねんふかからずなど云ふ者あれども是れは大なる間違まちがひにして其内實ないじつと申せし男子が獨り淫乱しんらんと恣しにせんとて婦人と妬むが故に其淫乱しんらんと戒しめ又己が淫乱しんらんあるに付て婦人の嫉妬しんを面倒めんどうありと思ふが故に其嫉妬しんと戒しむるものにこそ取りも直なさず男が手作てづくりの教を以て己たのが自由じゆうと違たぐうするの工風くふうは巧たくみなりと云ふべし或は少せうしく差扣さしかへく無理むりに或る人の説せつの如くにしたる今

れ男子には吝氣りんきの念ねんうすきやうに見ゆる所もあふんなきとも實は其念ねんなきにほらず男こそ吝氣りんきの家元いへもとなれども種々様々の工風くふうを以て婦人と縛付しばりつけ今は誠に安心あんしんの場合ばあひに至り吝氣りんきをべき種たねさへ乏とほしくしておとちまき見ゆるのみ犬も飼放かひばなしにすればこそ喰付くいく恐れあきども縛付けたる犬に向て誰れか用心うしんする者あらんや今の婦人は既いに已いに縛付けたる男に嫉妬しんの念ねん少せうなきも謂いはれなきもあらむ即ち其嫉妬しんの不用むようなるまでに至りし男の無情極まるの證據しやうことして見るべきものなり吾われは今この無情無理と論ろん破やぶるに必ずしも耳新みみあたらなき西洋せいやう説せつを用もちひず儒者にうしやれ教を示してその自みづから破れんことを望のぞむものなり所謂いひゆる聖人せいじんの教きょうお恕じよといふとあり恕じよといふ心の如しとの二字と一字にしたる文字ぶんじとして己おのの心の如く他人の心を思ひやり己おのが身に堪たへ難がたきことは人も亦堪へ難からんと推量すいりやうして自みづから慎つしむことなり

誠まこと申まを分わかちかきき聖せい人じんの教きょうにして吾われ々々も固かたより感かん服ふくいたすあれ共とも此こゝ聖せい人じんの教きょうと段々だんだんと世よに推おし弘ひろくて扱さ婦ふ人にんの心得こころえ方かたを承うけたまへるを男おとこには迎むかへる出で来き難がたき難なん業げふく苦く業げふくと女むすめに申まをし渡わたしたると如何いかある譯わけあらんかは男おとこ女むすめの間柄あひだがりに恕じよの道みちとていち少すくしも行おこはれざるが如ごとし畢ひつ竟きやうせるに古いにしへの聖せい人じんも男おとことして其その道みちを傳つたへる後こう世せいの人も男おとこあるが故ゆゑに男おとこの多た數すうに事ことと決けつして婦ふ人にんの事こと之これと忘わすれる却かへり恕じよの道みちをも唯ただ男おとこと男おとことの間まに通つう用ようせして先まづて婦ふ人にんの微び弱じやくにして理り非ひともに柔じゆう順じゆんあるは我われれに至し極ごく便べん利りなれば心こゝろを以もつて他たの心こゝろと推すい量りやうし至し極ごく都と合がよき教きょうと弘ひろめたる者ものならん婦ふ人にこそ誠まことと迷めい惑わく至し極ごくおして貴たふとき聖せい人じんの教きょうある恕じよの字くは功く徳とくとも男おとこ子こに專もつぱらよせられて却かへつて其その禍わざはひと被からる者ものと云いふべし男おとこ子こが婦ふ人に對たいして既すでに恕じよの一ひと義ぎを破やぶるときは何なに事ことか爲なすべからざるものあらんや畜たくに男おとこ女むすめ情じやう

合あひの事ことのならず財さい産さんの權けん柄べいも男おとこ子この手てに握にぎりて婦ふ人にんの雇やと入ひにんに異いならず交まじりの權けん柄べいも男おとこ子この專もつぱらにする所ところにして自みづから主な人にんと名な乗のりり表あらわす座ざ敷しき奥おくの閨ねより臺たい所じよの隅ぐみに至いたるまで一いつ家かれ唯ただ我われ獨どく尊そんおして少すくしく其その權けん限げんと犯たかそもの恠せうれを小せうにしては家か内ないの不ふ都と合がと云いひ大だいにしては世よの中なかの妨ばう害がいと云いふ或あるは吾われ々々が過あや日ひ以もつ來らいの日本にっぽん婦ふ人にん論ろんも付つても不ふ都と合がなり妨ばう害がいありとて不ふ平へいを鳴ならす人もあらんならず其その人ひとは必かならず男おとこ子こにして其その不ふ都と合がと妨ばう害がいの箇か條じょうを計かへ上あげ又また煎せんじ詰つめてよく吟ぎん味あじするときは誠まことと氣きの毒どくながら男おとこ子この身みに不ふ都と合がにして己おのがわがまを妨さまたげらるると云いふに過あやさるべし左ひだりをとも家かは男おとこばかりの家いへにあらず國くにも亦また男おとこ女むすめ共とも有ある寄よ合がの國くになるや如何いかせん吾われ々々の今いまの日本にっぽん男おとこ子こに向むかへ無な理りと歎たん願げんするに非あらずむかえの世よから氣き儘ままにしるる男おとこ子このことあらず今いま俄にこれを取と締し先まづと云いふにもあらず妻つまを亡なくしたらば

直に再縁も宜しうらん本妻一人にて不自由もあらざる誠に申しよき  
 事ながら極く内證又妾も無據ことならん又或は妙ち天地の春も浮  
 かれて花に戯るゝも一興あらん實又男女の事ハ容易に人の論すへき  
 者にあらず既に米國の或る地方にはモルモンの一類さへ繁昌する世  
 れ中あれば吾くとても人情を外にして石の如く金の如く偏窟論を  
 申すはあざざれども男子に不自由あるものは婦人にも不自由あら  
 ざるを得ず男子に内證ゆれを婦人にも内證あるべし男子が春の花に  
 戯るれば婦人も亦秋の月に遊ぶの興あるべし堅固なること金石の如  
 くなるも洒落あること流水の如くあるも其は男子は思召し次第又任  
 せて其議論は他日に譲り金石流水ともに男女一様あれば夫れにて満  
 足あり是れ即ち吾くがむつかしき事と云はず玄て古來我國人の耳  
 に慣れたる怨の字又註解と下し其教と男女双方又通用せしめんと願

ふ由縁として男子の欲せざる所と婦人に施すことかければ吾くの  
 心願成就したるものあり  
 むれまでは頻りに女大學の文句又付て夫れ是れと論じたれども是れ  
 と所謂徳教の文にして世間一般の文句の通りに事行ゆる可きに  
 もあらず前編も云へる如く聖人の教ハ賣物の掛直同様にして實に  
 まきと買ふものは半直にも三分一にも直切ることあるを今世女  
 大學の文句を其まゝに守る者もあるま玄唯一通りの御大法に玄て吾  
 くとても御大法は一字一句と證據にして喧嘩がま玄く議論するは  
 近頃おとなげなくして却て耻入るが故に女大學の文句論は是れきり  
 よて止めいたし女大學はみあらず都て聖人の教ハ精神と以て人の  
 心を動かし世間の風俗を成し動もすれば人の口の端に發して又實の  
 事又行ゆる所のものと拾ひ上げて聊か婦人の身の有様を説き其不

幸と救ふて以て日本國人は家の繁昌のためよし又國の勢力のため  
 せんと欲するものあり  
 世間の習慣としく婦人と輕ろまむるは第一に劇しき言葉は妻と娶る  
 は子孫相續の爲なりと云ひ其言葉の勢を察するに釜と買ふは飯を炊  
 くがた先ありと云ふが如し左れば飯さへ炊かざれば釜の買ふも及  
 ず子孫さへ求めざれば妻も亦不用なりと云はざるを得ずとも、夫  
 婦家も居て互に相助け又相助けられ相親しみ相愛して人間は快樂と  
 幸福と享べき天然の約束を必何とも言はずして唯一口の子孫相續  
 れた先なりと言放したるは即ち偽の始にしてこれより諸の惡事由て  
 來るべからざるもれあり子と産むの妻は飯と炊くの釜に異ならずと  
 云へば即ち一種の道具にして飯の出來ぬ釜を棄つべからざれば子なき  
 妻は去るべし或は釜の代りに鍋もて飯と炊くべきなれば妻の代りよ

妾と召使ふも可なり又の臺所も釜は一つにても鍋の多きと厭はざれ  
 ば奥に本妻一人にして妾は幾人も差支あるべからず畢竟人の身体と  
 道具として視るものなり此思想よりして今日世間通用の言葉に腹は  
 借物と云ふもとあり其故如何と尋るにこれ世も生るゝ子は本と父の  
 子にして母の子はならず今年の米は去年の米は種子より生るるも  
 のよしして地より出來たるものにならず土地は唯借物ありとの意味な  
 らん無學文盲も亦驚くべし人身窮理の吟味に生殖の道理を窮めて子  
 の種子は男女孰れの方も在るとも決すべからず卵は女体に潜みて精  
 液の男体に在り精液獨り子となるべからず卵も亦獨り化するを得ず  
 双方相接して子と成し是きより母の体内にやどりて其胎子と養ふも  
 のは母体の血液あり其機は神妙不思議にして人智と以て知るべから  
 ずと雖ども働の姿を喻へて云へば銅に亞鉛と交へて眞鍮とあるが如

し銅と亞鉛と孰れと母とし又父とするも差支あけきども兎角その二品と鑄して一つに混和せざれば眞鍮の生ずべからず左きば此眞鍮の銅と臺にして之に亞鉛を交へたるもの歟亞鉛と本又て銅と交へたるもの歟言葉の用ひ様よて孰れとも定め難し如何に無理なる説と作るも眞鍮と作るの本は銅にして亞鉛の借物なりと云ひ又は亞鉛が本よして銅の借物なりと云ふ者はあうるべし若しも斯る無理説が通用するものとして子を生むに母の体の借物なりと云はゞ之を逆にして父の体と借物と云ふも否と答ふる言葉はなかるべし或は此眞鍮の喩と止然にしる世の人の考ふる通り又男体は米の種子の如く女体は地面に如しとするも種子が地面を借りたるか地面が種子と借りたるか裁判と下だすべからず論より證據を擧げて示さんに生れたる子の骨格性質細りなる所に至るまでも父に似たり又母に似たり遺傳の病母

より傳はるる父に受るに異ならず眞實正銘父母の骨肉の一部分にして正しく平等に分れたるまゝと疑も亦は事實なれども之と知らぬ顔して腹の借物など云ふは唯婦人と無きものにせんとするの口實たるに過ぎず野蠻無學れ世ならばいざ知らず今の文明世界に無益れ空論にして之と許す者はなかるべし

右の如く腹は借物ありと云ひ妻と娶るは子孫相續れたるありと云ひ遂に子なき女は去るとまで聲高らかに世間に唱へて怪しむ者もなく男子は其靜なると好きまゝにしる公けに不品行を犯して人に隠えもせず妾を召抱へ又ふれを取替へ容易よ妻と娶りて容易に離縁するあど勝手次第なる者ありと雖ども頓と世の中の評判よもならざるは即ち前に云へる如く婦人の身体と道具と視るの惡風俗より起りたる次第なれども然りと雖ども婦人も亦是れ人間あり其萬物れ靈たるや男

子又異ならずして無情無心の道具又あらざれば斯る場合に當りたる妻の身となりて如何なる心地すべきや敢て去らるゝと悲しむにあらず、妾の多きを妬むにあらず、飯令へ夫々妾に戯るゝも我が身が去られ又殺さるゝも其は夫の淫乱無法にし、我が身と清淨潔白なれば命と棄て、天地に耻る所なし、即ち萬物の靈にして人の人たる徴なれども我が生を得たる身分ふくらべて厘毛の輕重あき彼の男子が斯る思想を抱きて斯る振舞に及びし由縁の其本と思ひ廻はせを遺恨又堪ゆべからず、貴人人間は身体に乏て道具と視らるゝは耻辱の限りにして人たるの榮譽面目は最早や廢れたるものあり、榮譽と奪はるゝは死するに若りず、斯る場合に臨みては飯令へ命と失ふとも心と金石は如く堅くして男は我儘と防ぎ止むべきものあり、母の腹は借物又あらずとの道理は前に陳べたる通りにて明白に分り

たることならん、即ち父母の間より子が生るれ、其子の半身は母に受け半身は父に受け、全く父にも同じからず、又母にも同じくならず、一種その間の者たること、前は比喩も云へる如く、銅と亞鉛に混えて眞鍮と生じ、鉛と安知謨尼と合せて活版地金となる、又異ならず、既又眞鍮とあり、活版地金となりて見れば銅もあらず、亞鉛にもあらず、又鉛にもあらず、安知謨尼にもあらずして、其中間一種のものなり、又この眞鍮に活版地金と合せたらば、更に一種の金と生じ、混和物の數はいよゝゝ多くして、其物の割合といよゝゝ少なかるべし、人の子孫相續の道理も之と異ならず、假に銅と安知謨尼を男子とし、亞鉛と鉛を女子として、系圖と作れば

男安知氏 娘お活  
 女亞鉛氏  
 男銅氏 悻眞鍮太郎

悻新太郎

腹は借物おあふざることに眞實よして世間の人もこれよ反對せると得  
 ずいよ〜以て閉口しよつぱ此新太郎は誰れの子孫と申すべきや母  
 のれ活は安知謨尼と鉛と五分づゝにて生れ父は眞鍮太郎も亦亞鉛と  
 銅と等分にて出来たる者にして其等分五分づゝに間に生れざる新太  
 郎なれば祖父祖母四人の孫にして母と父と二人の子ありと云ふの外  
 に言葉はあるまじ其骨肉の出處と求めて割合を勘定すれば安知謨尼  
 鉛、亞鉛、銅の二分五厘づゝにして活版地金と眞鍮との五分づゝと受け  
 たる人間なり明白至極の事實にして疑も議論もあるべうらざる筈を  
 るに不思議なるは古來世間の習慣お家と申す名を作りて其家と男子  
 より男子に傳はるものと定め女子は相續の數の内に入らざるものゝ  
 如くよして家に男子なければ他家の子と養子として家の娘に妻いせ  
 娘もなけきば男子女子ともに他人と入れ眞實の血統は斷絶しても家

名さへ續けば安心せるの風あるが故に例へば右れ系圖よある新太郎  
 も其家れ名が安知氏なれば幾代を経て安知の家と稱して女子は其  
 血統相續の中に言へられず數代累ある間には先祖の血縁を薄くある  
 のみか全く斷絶して跡形なきに至りても唯男子と求めて家の名を傳  
 ふるが如し是きなり女子の身に取りては大なる不利益にして其不幸  
 譬へんよものなし大家のひとり娘にて父母の亡き跡に家も藏も金  
 錢も自分一人のものたるべきよ態〜入婿を求めて之よ身代と渡し  
 其身は遙よ之にへりくだりて夫に事ふるよと主君の如くするは取り  
 も直さず己が身代と他人に進上して之と落手せられたる御禮として  
 御奉公仕るに異あらず不幸の甚だしきもれあり勘定の大間違ありと  
 云ふべしよも〜此大間違の本と尋るにむろし封建の時代に武士が  
 何か功名手柄して知行を貰ひ又何とか爵位格式の名と付けらるれば

其名も其知行も子孫に傳へ如何なる愚人も又病身者にても男子にてさへあれば父の家を相續して父の如く知行と取り父の如く威張る風俗なり之が故一家内の唯主人の公務大切とのみ言嘯して之と貴み崇め主人も亦大に得意になりて自分が公用と勤ればこそ家内共も安樂に衣食するまは非ずや妻と云ひ子供と云ひ實と申せば厄介至極、たゞ相續の長男一名に扣の次三男あまれば他に求る所のものなし妻なり娘の子あり固より無くて苦しからず之を養ふは主人の憐愍ありと云ひぬばかりに劍幕にて其實は人情に背く偽なれども武士の喰ひぬと云ふか楊枝とでも云ふべし疲我慢を張り遂に日本國中士族一般の家風と成して其風俗廣く平民の間も行はれ無益も唯婦人と粗末にふるを以て男子の榮譽の様に心得内心まの左まで思ふ事なまでもこそと荒々しく取扱ひ之を侮り之を輕ろしめ甚しは他人への愛

瘦

相又我妻と叱りて見せるなど實に癡狂の沙汰なれども偽の世には偽と貴み斯る癡狂を見て彼の家は家法嚴重なりとて癡狂の舉動も感服する癡狂も甚だ少なうらず以て大開達の世の中とはなりたるものなり數千百年の習慣よく實に以て言語道斷手も着けられぬ有様あれども今日は是れ封建の世にあらす槍先刃の功名と以て百年の榮華と保つべきにあらざり一代は夫婦にて一代の家を興し系圖も夫婦の系圖にして財産も夫婦の財産をば双方力と協せて生涯と終るべし之と偕老同權の夫婦とは申すあり或は男子が政府の役人などになれば何とあくむかしの武士めりして家内の見る目も貴き様と思はるべきも役人として身の働と以て月給の金を取るもとなきば普通の營業に異あらざ況して其他の農家商家等に於てとや家の男子が營業すをばとて何ゆゑに其妻子に誇るや一家の事ハ男子のまゝて行届くべきとあら

ず今の日本の婦人には藝能乏しくして世事の間合はぬものも多し  
 と雖ども無藝無能の男も珍らしからず兎に角に今の婦人のまゝに  
 しても家の内に男子ばかり居て營業に差支なれや否や婦人は果して  
 厄介ものにて無くて苦しからぬ者なるや否や若しも差支ありと云ひ  
 無くて不都合ありと云ふ男子は業は婦人と共に營むものにして一  
 人の業にあらす即ち家の營業にして其家と男女寄合のものおれを如  
 何あれバとて男子一人として權威と專よせしめ婦人を取扱ふと下  
 女同様よせしむるの道理あふんや若しも男子が無理に威張りて野鄙  
 ある言葉を用ひわが妻は召使ひの下女と等しと云はゞ婦人も亦止む  
 と得ず之に答へて夫と下男と稱し之を召使ふて働らかしむ者ありと  
 云ふべたなれども左りとは人間交際の禮にあらす夫婦家に居るは  
 道おぼらす男女相親しみ相愛するは情あならず苟も禮と知り道を辨

へて人情ある者ならん家事と取扱ふの權方ハ夫婦平等に分配して尊  
 卑の別なく財産もふれと共有にするか又は其私有の分限と約束する  
 か模様次第に従ひ兎に角は家と其時に當る夫婦の家として相互と親  
 愛し相互に尊敬するは人間の本分なるべし彼れ封建の時代に先祖  
 の家筋と大切に於て無理に男子の相續と作り之が爲は婦人を無きも  
 れにしたる風俗は今より以後除き去るべきものなり  
 吾々が日本の婦人の事につき彼れ是れと議論すれども固より婦人  
 の代言人を勤めて無理にも男子と争ひんとするにあらす實は男子の  
 た先考へても婦人と一人前の人とするは甚だ利益あることに於て  
 家に在りては一家のため國に在りては一國のため先、恰も一倍の力を増  
 さんとするの趣意にこそあき一家は夫婦二人暮しと云ふと雖ども其  
 婦人は有れども無きが如くおれば家のためには唯一人の力あるのみ

之と廣くして日本の人口三千七百萬人の内より役又立ぬと云はる  
 女子の數千八百五十萬人を引去ると殆の人口の半分に減じて國と  
 支ゆる力も唯半分に止まるべし斯く婦人の弱くなりく智慧も身体も  
 男子に劣り家のため又國のために頼甲斐なきのみか其身体の弱けれ  
 必子と産め必とて其子も亦大丈夫なる者少なし自然に日本國中は  
 人れ種を悪くして遂には世界中に日本やど人の骨格の微弱なる國  
 はなしと云はるゝまで又至るべしとは淺ましき次第ならずや皆是れ  
 むりしより婦人と苦玄めたる報なれば家と思ひ國と思ふて後世子孫  
 の有様と恐るゝ者は篤と勘辨いたす所なかる可らず  
 前編にも云へる如く今婦人にと自分の財産も亦く又家もなく云は  
 ゝ男の家に寄留すると同様の者よして是れと申を心配なきが故に智  
 慧と増すの道あるべからず廣く世間の人に附合ひ又金錢等の事を心

配すればこそ智慧の働も甲斐なくしくあるべきなれども生れて死す  
 るまで附合もせず金錢も取扱ふたること亦死者に何としく世渡りの  
 智慧あるべきや其無智と咎むるは山家の人に向て海を泳げと云ふに  
 異ならず若しもこれと泳がせんとあらば先づ海を見せて之れに慣れ  
 しむるこそ肝要なれこの事に付ては前編に論じたるが故にこゝには  
 悉しく言はず又徳川政府の太平長く打續たるに就ては世の中の萬  
 事萬端よく治まり人の行儀作法身持れ事に至るまでも喧しくなりく  
 其鋒先の唯婦人の一方に向ひ家に閉ぢこめをてなにひとつの樂み  
 るさのみか女の身も大切ある縁組の事さへ自由なす前に記したる  
 女大學の正寫しにまで至らざるも現在唯今、中以上の家風と見れば女  
 子が生れて年をろになり好き縁談として父母の仰せに任せ他人の家  
 嫁りてもその夫が無情無分別の男なれば詮方あるべからず里に歸り

て斯くと歎くも両親はなかく聞入るべき様子もあく泣く泣く我家へ立戻りて憂き歲月を送り果ては半死半生の病人とあり何を見聞えても面白うと何を飲食しても旨からず鬱々として一生涯と終るまゝ哀れなれ元來男女の間柄の最も秘密にして仮令へ命と失へばとて他人へと語るべうらざる處に好不好の情實あるものなるに父母の不了管か又は鄙劣なる心よりして或は重縁の好と尙りさねんとて年齢不釣合あるにも拘はらず娘の縁談を親類に求め或は富貴の家より縁談を申込むとあきば先方の男子は馬鹿にても不具にても好き家柄なりとて無理に娘に説き勸免否と答れば我儘者なりと叱り付くるが如きは我子の縁談と餌に用ひて父母の利益と釣る者と云ふべし世の中に娘と娼妓となし又は妾奉公に出すは最も耻る所にして義理と辨へたる父母あれば成る丈けこれと避けんところする中に表向の縁

談なれをどて當人の氣の進まざるもれを強るゝ其實あれと娼妓に賣るに異ならず無殘至極あらずや女子満腹の憂愁の實の父母に語るべからせ况や舅姑に於てをや獨りの胸にも案察するのまゝて其顔色も何となく晴々しからざれば夫も亦みれと見てますく面白からず遠又は内と外にきて外れ春の花に戯れ或は其花の枝にうらみく身を傷ひ家と破りたるの例は古來今世間にも珍らしからず其旅行と見るゝ女子の不幸の申すまでもなくして男子も取りても何の益する所なく唯いたづらに此世の不愉快を増す足るべきのみ又或は斯くまでの不始末に至らずして夫婦の居合いま一段宜ましく世間並の家は主人と稱する男にても其妻との間柄は君臣主従に異ならせ夫の出入に妻は送り迎へして恭しく禮を盡せば妻の外出も夫の唯るれ行く先きと言上せしむるのみよして之と見向きもせず蓋し男子の尊くして夫

婦有別の教に従ふもれか之と傍觀して可笑しきやとに嚴重なり夫は  
 出るに其行く先きと告げず其歸るも亦時ならずしく留主する妻と食  
 事れ時刻さへ延ばして之と待ち餘り歸りの遅けを心とならずも  
 支度して淋しく獨り膳に就き無言の晩食もろまゝに跡片付けて一  
 間の中冬の夜深けて夜廻りの聲もろともに戸を敲き歸り來りし夫を  
 見れば微醉の顔色今朝より其在り處又其用事の次第を尋きども唯  
 一口に御用にて有りしと云ふか又は集會の酒宴と答ふるの外なし竊  
 に案するも主人が世の中の事に付き至極得意の時もあらん又は大に  
 仕損じてちやゝ心の乱るゝ時もゆらんかどもまさか婦人又は明し  
 難えとの考よて善惡とも之と告げど如何ある事の降り來りくも汝等  
 の知る所にあらずとて一切おれと別ものにして近づけざるは古人の  
 教お婦人の言と聽かず又婦人に事を謀らざるの極意にてもあらんか

成るほど嚴重至極なる有様にして男子の立派なれども婦人の身に取  
 り不平なくして居らるべきや西洋諸國にては婦人が内外此事又付た  
 夫の相談に預るのみならず唯の一度の食事にては夫が謂れもなく約  
 束と違へて同食せざるは大不平ありと云ふ今の西洋人が尙ほいまど  
 我國の事情を知らざるを幸なれ若しもこれが公けよなりて彼の婦  
 人の眼と以て事の内實と見たらむ日本國は婦人の地獄ありと評する  
 者あるべし古來日本の婦人との地獄に慣れたりとは申しあがら等  
 しく天地の間に生きてる者にして人情も東西の別あらざれば心中の  
 憂愁と不平は外にみそ現はれざれども内に鬱々として日本國中に充  
 満するや疑あるべからず古言に王者興らんとするときは其地方の天  
 に紫雲翳くと云ふ英雄の徳義内に盛なれ心外又發して天文にも現は  
 るゝとの意味からん若しも其の王者の徳義が紫雲となりて現はるゝ

ならん婦人の憂愁不平は黒雲となりて日本全島に天に翳き然かも其  
 雲色は最も濃く處は中等以上の家の邊に在るべきあり  
 男子が獨り横柄にして婦人と苦しむれば其苦しむ者れ不幸のみならず  
 詰り男子の方に於ても片腕の力と失ふものにして國のためにもあ  
 らず、家のためにもならず唯いたづらに國中に憂愁と不平と多くし  
 て自りら弱くするまでのふとなりとの次第の前の一編に其大意を陳  
 べたりしが今また手近き事實の例を示して尙ほこの意味を明にそべ  
 し家の主人が威張るときの其押出しの甚だ美あり主公の威張るを見  
 ざれば何ぞ男子は尊きを知らんとでも云ふべき景色にて其威光の耀  
 くほど尊く見ゆれども男子の威を以てするも如何ともすべからざる  
 者は壽命にして殊に夫婦の年は大抵五六歳乃至十歳ばかりも違ふ習  
 慣なきば氣れ毒あがら夫は妻子と後にして先きに冥土へ赴かざるを

得老夫れも極老の上のことなれば先づ思ひ残す事もなりるべけれど  
 も不幸にしてこれ男が中年に死亡するもあきば其時を平生の  
 罪業應報の日にしう因果免かれ難し跡は遺る者は若き寡婦と幼少の  
 子供はありて一家の眞の暗異ならず家も餘財あるか、借財あるう  
 身代の帳面さへ不分明にして貸したるが如く、借りたるが如く、存ぞも  
 寄らぬ處より掛合に預りて先方の言を聞けば我が住居の地面家屋は  
 既に抵當にありて近日明渡しの期限ありと云ひ又この方の帳面を見  
 ざれば誰れへの貸金何ほど、ありて之を催促すれば其は帳面の間違な  
 らん此借用證に對しては貸主は存生中に認めたる返り證文ありて件  
 の如しあど、て逆も婦人小兒の手に叶ふべき事とあらざき先づ以  
 て親類縁者より又先代の朋友より依頼きて死後の始末の相談會を開き  
 寡婦殿と家の内と掻きささへ金錢出入の帳面は勿論、貸借の古證文、新

証文、地券、公債、證書、年賦、濟口の通帳より他人と往復の手紙、案文等凡そ  
 主人の生前に極秘極密として家内の者へも見せざりし書類とば二重  
 錠れ用算筒より引出して相談の席に披露し自分に一切分らぬ事に  
 付き何分も皆様方御相談の上にてよろしくお頼申すと言ふの外  
 し不始末至極おらずや夫の死後と承けたる寡婦の取りも直さず一家  
 の主人として子供の世話も一手に引受べき身分あるに主人として自  
 分れ家の貧富を知らず、貧富を知らざれば苦樂も知るべからず唯他人  
 の差圖よて豊あり樂なりと云へるれを難有しとて悦び、貧なり苦あり  
 と嚇さるれば恐入りて悲しむれと其有様を喻へて云へば現は自分の  
 身体と風呂の湯に浸しながら自分に加減と知らず側より熱しと云へ  
 ば熱しと覺へぬるまと思ひ、他人の差圖次第にて泣き  
 つ笑ひつとる者に異ならず死人若し心あらむ此不体裁と見て快きや

否や必き草葉の蔭よて愉快なりとは思ひざるもどならん尙不愉快な  
 りと申すの彼の親類朋友等が家政取調の序に入らざる事にまで喙と  
 差入れて家内子供に差圖し或は生前秘密の書類などなくさる半分に  
 披見し其時の事情をば知らず書面の文字のみ讀み下し當家の先代も  
 存在中には云々なりしかな、始はめて合點もきたりあど、竊お嘲り笑  
 ふこともあしとすべからず死後とは申しながら残念至極なまや凡  
 そ今の人間世界の智慧と徳義との位は居る限りは人として誰れも秘  
 密なからんや唯其外は現れせして奇麗なるれを而して此秘密を語る  
 べきは夫婦親子のまにして羊盜む悪事まあふざるも子は父のため  
 隠し、父の子のたれお隠し、唯夫婦の間に語るべく示すべくして他言他  
 見を禁ずる者甚ぶ少なからず然るに今家の主人が死すると同時に一  
 切の秘密と人に披露し、然かも生前自分の深意の在る所を誤り解さ

れく嘲を取るが如きハ淺ましき沙汰の限りにして其生前の無分別と云ふより外又言葉もあるべからず又金錢の損得より云へば主人の不幸と聞いて昨日までの朋友も今日の敵となり由緒ある親類はるか時としては骨肉の兄弟までも他人となり家督相續本家別家の争論異腹の弟が分前を取らんと云へば兼て義絶したる叔父も不理窟と述立るなど容易あらざる混雜にして遂又出訴の沙汰に及び一家の財産は煙の如く消え失せて唯世間の笑種とのみなりたるは例は古來誠と珍らしうらむ或は今日混雜最中の家も多からん其事の因縁と様々あるべけれども不幸の後と承けたる後室が平生夫と輕蔑せられて家の事と知らず家人として家事に不案内なるがため己れの家と他人に任せて斯る不始末に立至るもの少からず是亦死者が冥土にて後悔する所あらん冥土の後悔は無益なり若しも其人が平生吾々の説に

耳と傾け婦人の貴ふべきと知りて其妻と重く取扱ひ夫婦正しく平等の位に位して音に形ある財産等の始末を兩人にて引受るのとならず形なき心の事又至るまでも其公なると私あるとに論なく夫婦打明けて懇お語り合ふの習慣と成したらむ主人早く死するの不幸又遇ふも家政の光りかは耀きて暗にあらず夫れ是れする中にと幼少の子供も成長して第二世の光明を放つべし即ち是を獨立の家の相續法なり古來世間に此反對の例多きハ全く男子の不心得として婦人を一人前の人として取扱かはざる因果應報と申すべし故又云く婦人を貴ふは獨り婦人のためもあらず亦大に男子と利益するがた然ありと左れば夫婦家又居る者は一家と二人ハ力にて支ぬ其間に聊かも尊卑輕重の別なきは今更改先て言ふにも及ぶざることにして婦人として家の内おばうり居るべきにあらむ自由自在に外に出て、男女の別なく

立派に附合ひすべしと勿論其心をも内外の事と配りて善事喜び  
 悪しき事は憂ひ身も心も甲斐なくして常に家の荷物と半分持つ  
 れみからせ日本國の半分は婦人のものと心得りるめにも男子に後  
 れと取らざる様に心の慮より思ひ直すべしと今日の要用なきども如  
 何せん數千百年男子の我儘より苦しめ苦しみ今とはや其身体  
 さへ衰弱しく心も亦縮み所がり俄に奮發の甚ぶ難かるべし是に於て  
 か吾々が男子に向て大に求める所のものありと申すは君等の先祖が  
 不文明にして自から罪と知らざりしと申しながら幾百年となく無  
 理と働いて終に今日の此様に陥れたることなきは其子孫たるの本  
 分として先祖の罪業消滅のため今より大に心して婦人を引上げ遂に  
 己れと平等の位に上らしむるの工風專一なるべし或は政府にても民  
 法の編製などあらば此邊も専ら注意せらるるに婦人のために利益する

こと多かるべしと雖ども政府にて如何ある文明の法と施すも人民が  
 不文明にては其法も用と爲すべからず故に苟も日本國の男子にして  
 就中文明の智識あらん者のこの大任と我身に引受けたるものと覺悟  
 と定め先づ之を自分に行ふて人よりも亦勸ることと怠るべからず其箇  
 條を云へば決してむつろしき事とあらせ女子が生れたらば男子と區  
 別せざして之と愛し之を重んじ幼少の時より女子なるが故とて少  
 しも其取扱ひと粗末にせべからせ次第に成長すれば先づ身体は發生  
 に注意して學問技藝を教ふことと是亦男子に異なるべしとせ世間の附  
 合も友達に交際も自由自在にして家事世事ともに其大概と知らし然  
 又家に財産あらば男子に分ち與ふる通りに女子にも分前と取らせて  
 其始末と任せ尙るの上にも何か一藝と仕込みて行々は其藝をもつて  
 一身の生計も叶ふやうにゆゑまひるは最も大切なる事にして身に財

産と所有して兼てたしなとの藝能あれば生涯男子に依頼するに及ば  
 老獨立の精神も自然にみれに由りて生ずべし即ち女子の教育を學  
 のみに任せずして家事世事と以て教ふるの工風なり  
 扱今の世又斯る女子が多けき之と婚姻して男子も甚た幸なりと雖  
 ども娘の婚禮は披露に其兩親が定文言として述る口上に違はず誠  
 不調法者不束者不行届者ばかりなれば夫たる者の常又之を助けて其  
 氣象と導かざるべからず是れは今日西洋諸國にては先づ無用の事な  
 れども日本國の妻と取扱ふには甚だ大切なる箇條なり夫婦家に居て  
 尊卑の別あるべからざるは毎度申す通り勿論のまとなれども尙この  
 上に婦人として家の政事に參らしめ世間一般の事情時勢を知らしむ  
 ることに怠るべからず或る學者の説に子供と育るには常又遊び戯れ  
 てかりそめも苦くしき顔色すべからざるの勿論のことあれども

其子の無智あるを愚弄して法外なることを語るよりも矢張りこれを  
 ひとりの人として戯の中にも道理の筋をば紊るべからず例へば世俗  
 にある雷の繪を見せくも一通り繪ときして扱云ふやう此繪の奇麗  
 れども其事はうそなり雷と申す之天の太鼓にもほら虎の皮の犢鼻  
 又もあら老實はエレキトルの所爲にて彼の電信の力と同様のものあり  
 汝等も成長の後に之雷さまの學問もせねばならぬあど一寸したる  
 事よても意味あるまを面白く語るの父母も大切ある心得ありと云  
 へり子供と扱ふにも尙は斯れ如くして況んや年既に長玄たる一家  
 の妻をや孥く之と愚弄すべからず其萬事に就き謙遜えて扣目なる  
 の幼少の時より身に染込たる習慣なれば或はこれに入組たる物事と  
 語りて道理を解す又敏き者なきにほらず其證據と見んとあらば夫婦  
 暮しのときに音も響もなく至極温順内端ありし婦人が不幸に夫に別

れて後、子供と養育し家の事と理め親類世間の附合は勿論、家業をも一  
 手支配し家の繁昌は却て先代に優りて俗に所謂女大將とある者は  
 世間に甚ぶ少なからず是等は元來其婦人に才力ありしなれども夫の  
 存生中之始終押し込められ、天然の働を伸すことと得ず其死後に至  
 り世事に揉まれて始て發したる者あり夫は生前に早く之を導かざり  
 しは誰れの罪ぞや左れを婦人の言語舉動は靜るを見て一概に之を  
 侮るべらず仮令へ鈍く見ゆる者よても之と語り之に示すは取りも直  
 さず之と教るの方便にまて家内何事に限らず眞面目に告ぐ知ら  
 せて利害得失よしあしと判断せしめ時として夫婦互に討議争論も  
 苦玄からず斯の如く次第々に慣れば愚妻變て賢婦たること甚ぶ  
 易く夫のた先に無二の相談相手たるに至るべし則ち是れ吾々の申  
 す夫にして妻を敬するの法あり

妻を愛すると知りて之を敬すると知らざるは世上一般の惡風俗にし  
 と良家と稱するものにて此風は免れ難し或は西洋文明の學者と  
 名乗りあがらも此一義丈けは先づ以て和漢は古風を便利ありとして  
 男女同權など聞いて立腹する者あきにあらず是等は狝猴にして冠を  
 るにはあらずで儒者の地金の半面は文明の鍍金して御都合次第に裏と  
 出したり又表と見せたりする者あらん夫婦家に居り夫の威權固より  
 強し妻の言語舉動のおとなしきと見て心竊にこきを侮り之と相談す  
 るの無益なり又面倒ありとの底意ひて日々の飲食衣服等れ事の外は  
 一切問答するまとなく、たまは是きは大事と思ふことに就き妻が不  
 審と起しても婦人の知る所にあらずとて唯一口に叱り付るか左なけ  
 きを笑て答へず妻の身とありては實に取付端もなき有様にして夫よ  
 さへ聽かれざることなきば他人が深切に之に語るべしにもあらず詰

り夢中にこの世を渡るの外にせんかたもなま左りとして其夫が邪見薄情なるに陥らず夫婦の間は至極むつましくして妻と愛すること甚だ深し衣食とくも十分おして安樂に日を送り主人にさへ上申すれば大抵のものと許可して外へも出し何一つれ不自由なくして世俗の眼ともて見れば結構ある内君と云はるゝ者あきにあらざきどもそもく是れは凡俗の鑑定違ひおして吾くま於て之感服すると得ざるなり本來衣服飲食は人の肉体に就たたるものとして精神の事に陥ら老如何に肉体の保養を丁寧おするも精神の事を輕んずるときは其保養は犬猫の寵愛に異ならず飼犬に二汁五菜の料理喰はせ猫お錦の着もの着するも唯これを愛するのみ敬するに非ず左れを夫が妻に衣食の不自由なからしめく俗お所謂かりいこぐるその身となすも一點れ敬意と表して精神の上お之を重んずるお非ざれば妻と視るものと犬猫は如

しと云いざるを得ず即ち其敬意とは何ぞや妻を一人前の人として夫婦同等の位に位し毎事に之に語り毎事お之と相談するおとなり既に精神の上に敬ふの意あれを家の富も夫婦の富おして其貧も亦夫婦の貧なり貧富これを共にして常に互に親愛し時として内外の事お説の合はざると況い議論するも可なり夫婦の議論好まじきことには陥らざきども相互に重んずるの精神より出るものなれを彼の寵愛一偏お美衣美食を興へて犬猫の如くするものお較れば遙お相違あるものと云ふべし話の端は異あれども近來日本に國會は沙汰ありそもく國會とは日本國中の人民が國の政事に参りて政府の法律并に歳出歳入等と相談議決する事おして其趣意と尋れば日本國は日本國民物体持の國なれば政府の役人ばかりにて政事を專にする道理はあるべからず人民も

其中に加は、りて相當なり日本の人民の數千百年來の習慣にて政府に押へ付けられ言論舉動さへ自由からずして無智のやうに見ゆれども世の中の先達が之と引立て、正當の道に導きさへすきば立派に一人前の人と爲りて立派に國の政事の相談相手となるべし仁政を施して國民を愛するとは古風の政事にして今の文明世界は唯仁政の之と以て事足るべきにあらず民を愛するに兼て又ふれを重んぢ國事に參るべき位と與へて云は、政府と人民と相共力を合せ相共國を支えんどの大意にて日本の官民ともに此一義を異論なく國會開設は數年の内にあるべしと云ふ尤も至極に事にして吾々も感服いたすなれども凡そ人間世界の事は大抵つりあひのあるものにして今且が國にて國會を開きて國の政事を公平にするると云ひながら國民の家の政事の既に公平なるや否や屹と承はり度きまとなり家の男子と

政府に喩へ女子を人民に喩へて其間柄を見たらば果して如何なる政府や壓制とも專制とも實に名の付けやうもあるべからず男子が家の財産を勝手次第にして其出入さへ婦人又告げざるは政府が人民の私有の權を奪ふたるものあり婦人の言は聽くべうらずとて家の内外の事小喙と容るゝを許さざるの政府が人民の口を封じて議論するを禁ずるものに似たり尙甚ぶしきは男子が獨り不品行を犯して快樂を恣にし婦人をば深く閉籠めて自由あらしめず鬱々もの思ひして終に其身体をも傷るに至らしむるは暴政府が民を虐げて自り厚うして百姓と塗炭又苦乏むるものに異ならむ幸不斯くまでに至らずして婦人を親愛すと稱する者よても唯これに犬猫同様に玩弄を寵愛するばかりにて奸雄が黔首を愚ふするもの不等しきのみ扱ひよ、國會を開くに至れば其會に出席する者は日本の朝野にて最も公平を重ん

する人物の之にして國の事を議するには至極公平あるべしと思はる  
 れども其人物は如何ある處より現はれ來りて者かと尋れば申ども赤  
 面の仕合あれども壓制專制の家より出頭したる者おして一家内の唯  
 我獨尊暴政の執權職と答へざるを得ず家に在りては無理無法の政事  
 お慣れ國お在りて公平の政事を議すと云ふ家と國とは成るほど別の  
 ものにして左る不思議も行はるゝ事ならんあれども何分事の姿だけ  
 を見ても幾多の小地獄より現はれ出でたる者が一場の大極樂お集り  
 て衆生濟度の利益を説法するが如く甚だ不釣合お思はるれば何卒國  
 會開設の趣意お從ふて家會をも開設し婦人女子お家政參與の權と與  
 へ度さものあり  
 日本婦人論は前編後編既に長々しく論し盡し新聞紙讀む人も倦きた  
 らんと恐るゝ程あれども世上よさまで反對の説なきは道理上に打て

掛る所なきの故あらん併しおがら人の心は道理の之を以て支配すべ  
 きよあらず道理に於てい成るは自然るか如し一應閉口いたすと雖ど  
 も廣汎人間世界は左様にい参り難くして様々の差支あるものなりと  
 て或はこの節世間の識者學者達が尤らしき反對説と工風する最中な  
 るやも知るべからず吾々は斯る説の出ると待てこれに返答するこ  
 ろ正當なりと思へ共其反對説が吾々疾く心の中お待ち設けたる  
 趣向の反對説なきば之と承はるも無益なるが故に試に吾々が自ら  
 ら反對説と配し自問自答して古流學識者お判斷と乞はんとす吾々  
 の反對説は徒に古然らしき女大學など後楯おは用ひずして別お一  
 説と立ると左れ如し云く日本婦人論の趣意甚だ感心いさしたり男女  
 本と平等の者なれば之と同様お取扱ふて自ら婦人お氣と引立て其  
 精神も身体も甲斐なくしくしてせめて今の西洋諸國の婦人の如くな

らし先んとは至極の妙案なれども此事と世間と勸究て實地に施し行ふの端を開きたるときお掛念は簡はあきや婦人論の記者に於くも今の日本の女子に智慧の乏しくして勘辨少なきは飽くまで承知のみとあらん無智無勘辨は輩が新らしき言を聞き奇妙なる物を見るときは其正味の利益をば嚙と分るの違なくして先づ之と面白く思ひ無暗も新奇くと浮かれ出して本来の大趣意を誤るれみあらず遂に全く其趣意と逆様に解して働く者なしとも請合ひ難し既に今日又於ても女子が學校などおて少しく讀み書きの道を覺へて訛語まゝりお洋語を語り己れひとり物知り顔して其實と針もつ法さへ知らを父母年長の人と目の下に見くゞして甚ぶしきは衆人廣座の中お議論がまじき言と吐き尙や甚たしきは女子れ身として演説おど實に驚入りたる始末ならずや今より少く用心して斯る惡風を矯先直さんとく工風最

中なるその折しも此女子等が古來和漢に珍らしき婦人論と見たらば如何ある心地をべきや得たり賢し果えて然りとて新奇のなま嚙ますく增長して際限もあるべからず故に日本婦人論の編るの奥意は誠に好しと雖ども今の時節にこの論の流行は婦人と救ふおはあらで却て其徳義と破るもれあり記者はこれ邊に見る所あるや否やあど、問掛けられても吾くとに於てはこの位の難問は素より覺悟の前おれば之に答ること易し難問の第一お婦人論の趣意の好ければ之と讀む者が誤り解すことと恐るゝとは詰り其趣意の書きやうが宜しうらずと云ふに過ぎず左れば是れは記者の筆の巧ならざる罪なれば其文法に就ては平又教を乞ふ所おれども今の女子が讀書を覺へて洋語と用ひ云々の譴責の女子れみ又限らず男子にも西洋の訛語とまやべる者は甚だ多し女子が針もつ法を知らざるは甚ぶ恐入るなれども男子

が唯饒舌る心かりにて筆もつ法を知らず、込入りたる論説文の勿論手紙さへ代筆を頼むが如きも随分見苦しき者なり又女子が物知り顔にて長者を見下だすとは甚た受取り難き話にして此事お就ては格別に男子の方を咎先ざるべからず今の男子の何の因縁あれ心年長の婦人を輕蔑するや一寸親類の寄合または酒宴の席などにては男子とあれ心年齢の長少と問ひせして婦人比上座に就て其飲食の間も男子が婦人を助け取持たんとはせせして却て婦人に助けられ男子が婦人の送り迎へに周旋はせおして婦人の心付きにて男子の袴羽織をど始末すきは平氣にて之を任するとは無禮至極ならずや尙ほ甚しきは例の道徳に教もも父母に事へよ長者と敬へと云ひおがら忤は母と踏付けて其上よ坐し姪は叔母と下にし弟は姉と後にする等次第不同乱暴狼藉に様なれども之を咎る者としていなし此様子を見れば父母に事へよ

とれ教も母よ對しては唯これを養ふのまよて敬ひ尊ぶに及ばずと云ふの趣意なるが如し吾々の見る所にては大切ある人倫は道お於て如何やと思ふほどの事なれども世上の人のこれを見通して頓着せざるこそ是非おけき左れば今の女子が不遜横柄なりと云ふも男子の振舞に較れば何ばかりの事とせるにも足らず之を見て咎る者は唯古來の習慣お少しく異なりとて仰天するのみ若しもおれに疑おらば試み男子の中より至極柔和よして至極おとなしき一人物を撰び其姿を女形に仕立て、婦人の席に押出し言語舉動をば平生の如くならしめたりば如何なるべきやおの偽女子が同席の婦人達を目の下よ見くぶして獨り出しやばるれみならお男子に逢へばとて憚る色もあく言葉粗く起居穩かおらお酒は呑み煙草はふかし煙管もて唾壺たたく音さへ劇しくして一座愉快の興に入れば身なりと崩して客の前お足よ出

すやも言いられず實じつは驚おどろ入りたる婦人なりとて満座まんざの人々は顔見合せかほみあせ竊ひそに爪つまはぶきして之これと厭いとひ惡にくむことならん左れば今の世間に稀まれなる女子むすめと不遜ふそんなりと咎とが先俗せんじゆんに之これとオテンバと稱しやうえて惡にくめども其オテソバの男子おとこの中なかよて柔和にやわ至極しごく所謂しよゐグズと評ひやうせらるゝ者に較くらべても尙なほ遙はるか小温順せんとんなりと云はざるを得ず同どう玄言語げんぎよ舉動ふるまひえて同じ禮儀れいぎ會釋あしやくしても女子むすめなるが故ゆゑに咎とがめらるゝ男子おとこなるが故ゆゑに許ゆるさるゝれど不公平ふひらうある沙汰さたと申まをすべきものあり

右みぎれ道理だうりは相違さうゐはなけれども今いまは一歩ひとあしと譲ゆづりて日本婦人論にっぽんおんなのりの行おこなはれたるがために世間の婦人が之これと解げし誤あやまり言語ごんご道斷だうだん手に餘あまるあばれ者を生じやうえたりとせんか尙なほこの論を止やめおすることは出来でき難がたし其次つぎ第一だいいちの本もとと我國わがくにの婦人の位くらゐを引ひ上げて男子おとこと同様どうやうの者にするは家のためも國のためも至極しごくの要用えうようあれば其事そのことに手てと着つけたる上うへにて少

しばかりの故障こしやうと生なまるとも之これと心配しんぱいするに違ちがわらずあむき者が生なずればあむきざる者も亦また生なまると年月としつきと過とる間まには自然じねんに本筋ほんすぢの道理だうりも分わりて世の中よのちうは穩ただやかよあるべし例たとへば三十年前さんじゅうねんぜん日本にっぽんの國くにと開ひらいて外國ぐわいこくの貿易ばうえきと始はじめたるが如ごとし開國かいこくの當分たうぶんと様々ふつがふ不都合ふがふも少すくなからず貿易ばうえきの業わざも掛かる商人しやうじんさへ良よき家いへも生なれたる者にあらず云いはばれ者ものばかりばかり斯かくてい國くにと開ひらかざる方かたこそ利益りえきなりと思おもひしほどの仕合しあひなりしかども年月としつきと過とる間まには日本人にっぽんじんも次第しだいに外國ぐわいこくの交際かうさいに慣なれ次第しだいに交際かうさいの道理だうりと知しれば彼かのあばき者は次第しだいに消きえて今は次第しだいに本筋ほんすぢの人物じんぶつが外國人ぐわいこくにんと附合つぎあふ事ことと爲なりたり左れば開國かいこくの當分たうぶんに少しの不都合ふがふを掛念けねんして鎖國さこくすることが不利益ふりえきならば婦人論おんなのりの新しん奇きも其流行りゆうかうの初はじめに聊いさかの不安ふあん心しんあるも之これを恐おそれて其論そのりの趣意しゆいを潰つぶすの理りは極ごくるべからざるなり







福

41-1

著作